研究紀要論文抄録

教科科目複合型総合試験の問題内容分析

東北大学アドミッションセンター　倉元直樹
研究開発部試験臨床研究部門　柳井晴夫

昨今，教育改革の流れの中で，大学入試への利用を目的とした総合問題・総合試験の研究は1つの重要課題として位置付けられている（中央教育審議会，1999）。現実に大学入試で実施されている総合試験は多様であるが，内容的には「教科科目フリー型」，「教科科目複合型」の2タイプに分類可能である（大学入試センター，1998）。現在の大学入試センター試験が科目毎の学力試験であることを考慮し，そこからの自然な拡張の上に共通試験における総合試験を考えるならば，教科科目複合型試験形式がより現実的と言えよう。

本稿は，平成8～10年度に大学入試センター研究開発部の共同研究プロジェクト「大学の各専門分野への適性の評価を目的とする総合試験のあり方に関する共同研究」の一部として作成された教科科目複合型問題の内容を統計的資料に基づいて分析したものである。総合問題の研究は，従来の視点とは違った新しいテストの開発研究であり，個々の設問について統計的資料に基づく分析を行うことは特に重要な課題である。

本研究では，26名の作題者が異なる科目の組合せで13組のペアを作り，2つの科目内容を複合させた共通試験向きの形式による総合試験試行問題を作成した。文系複合型のペアが2組，理系複合型が2組，文理複合型が9組である。分析対象となったのは，作成された問題を用いて構成された「B1セット（大問9問）」，「B2セット（大問10問）」と呼ばれる2つのテスト冊子を用いたモニター調査のデータである。2つのテストそれぞれに，大問単位と小問単位の分析を行った。大問単位では得点率，無解答率，解答所要時間，合計得点との相関を調べ，小問単位では正答率，高校の科目の履修経験との相関，因子分析による設問の分類に基づいて検討を加えた。

キーワード：総合試験，共通試験

全体として，理系の正答率が文系よりも高かった。特に，B1セットでは「英語－物理」という組合せの第6問に様々な点で大きな文理差が見られた。また，B2セットには，B1セットと比較すると文系が理系より正答率が高い設問も見られた。以上の分析の結果，

1．総合問題の作成においては，設問の内容的なバランスが難しく，かつ，重要である。
2．現在の高校生の細分化された学習状況がテスト結果に反映されている。

という知見が得られた。複数の問題作成者による協力関係についての研究が，今後の重要な課題の1つである。

なお，本研究の必要性の背景要因となる最近の教育環境の問題については倉元（2000）を参照していただきたい。研究目的や研究内容の詳細は研究プロジェクトの最終報告書（平，1999）を，また，問題の内容については最終報告書別冊の問題集（大学入試センター研究開発部，1999）を参照していただきたい。